

小川未明作

「赤い船」

朗
読
鍋
田
啓
子

小川未明の履歴については「月夜と眼鏡」の項参照。



「赤い船」は未明童話初期の代表作と言われ、1903年（明治36）7月号の「少女」に発表された。内容は「貧しい家に育った少女はオルガンの音を聞きたびに外国を思い浮かべ、大きな汽船を見ては船に乗って外国へ行きたいと考えていた。そんな彼女のところへ、ある日、南の海から一羽のつばめがやって来た」というもの。

未明の初期の童話の特徴について、「それまでのお伽噺と違うのは、教訓臭が全くないことと、主人公が従来の王子様やお姫様、ないし武勇すぐれた英雄などではなく、ごく普通の、どちらかというところ貧しい少年少女であって、それらの少年少女の生活の中に、人生の美しいものを捉えようとすると、そこである」と、「児童文学名作集・上」（岩波文庫）には書かれている。まさに「赤い船」はその代表作と言えよう。また、未明にこんな言葉がある。「私は子供の自分を顧みて、その時分を感じたことが一番正しかったやうに思うのです」。

露子は、貧しい家に生まれました。村の小学校へ上がったとき、オルガンの音を聞いて、世の中には、こんないい音のするものがあるかと驚きました。それ以前には、こんないい音を聞いたことがなかったのです。

露子は、生まれつき音楽が好きとみえまして、先生が鳴らしなざるオルガンの音を聞きますと、身がふるいたつように思いました。そして、こんないい音のする器械は、だれが発明して、どこの国から、はじめてきたのだろうかと考えました。

ある日、露子は、先生に向かって、オルガンはどここの国からきたのでしょうか、と問いました。すると先生は、そのはじめは、外国からきたのだといわれました。外国というところ、どこでしょうかと考えながら聞きますと、あの広い広い太平洋の波を越えて、そのあちらにある国からきたのだと先生はいわれました。

そのとき、露子は、いうにいわれぬ懐かしい、遠い感じがしまして、このいい音の

するオルガンは船ふねに乗ってきたのかと思おもいました。それからというもの、なんとなく、オルガンの音おとを聞ききますと、広ひろい、広ひろい海うみのかなたの外国がいこくを考かんがえたのであります。

なんでも、いろいろと先生せんせいに聞きいてみると、その国くには、もっとも開ひらけて、このほかにもいい音おとのする楽器がっきがたくさんあつて、その国くににはまた、よくその楽器がっきを鳴ならす、うつくしい人ひとがいるということである。で、露子つゆこは、そんな国くにへいつてみたいものだ。どんなに開ひらけている美うつくしい国くにであろうか。どんなに美うつくしい人ひとのいるところであろうか。そしてその国くににいくと、いたるところでいい音楽おんがくが聞きかれるのだと思おもいました。それで露子つゆこは大おほきくなつたら、できるものなら、外国がいこくへいつて音楽おんがくを習ならってきたと思おもいました。露子つゆこの家うちは貧まずしかつたものですから、いろいろ子細しさいあつて、露子つゆこが十一じゅういちのとき、村むらを出でて、東京とうきょうのある家うちへまいることになりました。

その家はりっぱな家で、オルガンのほかにピアノや蓄音機などがありました。露子は、なにを見ても、まだ名まえすら知らない珍しいものばかりでありました。そしてそのピアノの音を聞いたり、蓄音機に入っている西洋の歌の節など聞きましたとき、これらのものも海を越えて、遠い遠いあちらの国からきたのだろうかと考えたのであります。昔、村の小学校時代にオルガンを見て、懐かしく思ったように、やはり懐かしい、遠い、感じがしたのであります。

その家には、ちょうど露子の姉さんに当たるくらいのお方がありまして、よく露子をおあわれみ、かわいがられましたから、露子は真の姉さんとも思つて、つねにお姉さま、お姉さまといつて懐きました。

よく露子は、お姉さまにつれられて、銀座の街を歩きました。そして、そのとき、

うつく 美しい店の前に立って、ガラス張りの中に幾つも並んでいるオルガンや、ピアノや、マンドリンなどを見ましたとき、

「お姉さま、この楽器は、みんな外国からきましたのですか。」

と問いました。お姉さまは、

「ああ、日本でできたのもあるのよ。」

といわれました。

露子の目には、それらの楽器は黙っているのですが、ひとつひとつ、いい、奇しい妙

な、音色をたてて、震えているように見えたのであります。そして、晩方など、入り

日の紅くさしこむ窓の下で、お姉さまがピアノをお弾きなさるとき、露子は、じつ

とそのそばにたたずんで、いちいち手の動くのから、日の光がピアノに当たって

はんしゃ
反射しているのから、なにからなにまで見落とすことがなく、また歌いなされる声や、

かすかにふるえる音のひとつひとつまで聞きのことになかったのであります。

つゆこ
露子にはピアノの音が、大海原を渡る風の音と聞こえたり、岸辺に打ち寄せ

る波の音と聞こえたのであります。そして、ピアノをお弾きなさるお姉さまが、すき

とおと
とおるお声で、外国の歌をうたいなさるお姿は、いつもよりかいつそう神々し

く見えたのであります。水晶のようなお目は星のごとく輝いて、涙が浮かんで

いたのであります。

つゆこ
露子は、自分の母さまや、父さまのことを思い出し、また村の小学校のこと

などを思い出して、いつしか熱い涙が、ほおを流れたのであります。

露子つゆこは、おりおり、自分じぶんが船ふねに乗のって外国がいこくへいったような夢ゆめを見みました。そして、
外国がいこくでオルガンを習ならったり、ピアノを聞きいたりして、たいそう自分じぶんが音楽おんがくが上手じょうず
になつて、人々ひとびとからほめられたような夢ゆめを見ておおいに喜よろこぶと、夢ゆめがさめて驚おどろ
いたことがありました。

* * * * *

初夏はつなつのある日ひのこと、露子つゆこは、お姉ねえさまといっしょに海辺うみべへ遊あそびにまいりました。

その日ひは風かぜもなく、波なみも穏おだやかな日ひであつたから、沖おきのあなたはかすんで、はるばる
と地平線ちへいせんが茫然ぼんやりと夢ゆめのようになつて見みえました。白しろい雲くもが浮うかんでいるのが、
島影しまかげのようにも、飛とんでいる鳥影とりかげのようにも見みえたのであります。

お姉ねえさまは、いい声こえでうたいながら、露子つゆこの手をとつてお歩あるきになりますと、露子つゆこ

も、きれいな砂すなを踏ふんで波打なみうちぎわを歩あるきました。波なみは、かわいらしい声こえをたてて笑わらった。このとき、沖おきのはるかに、赤あかい筋すじの入はいった一つゆこそうの大おおきな汽船きせんが、波なみを上げあて通り過とおぎるのが見みえました。露子つゆこは、ふと、この汽船きせんは遠とおくの遠とおくへいくのではなないかと思おもって見みていますと、お姉ねえさまも、またじつとその船ふねをごらんになりました。

「お姉ねえさま、この海うみはなんという海うみなのでしょう。」

と聞きくと、「この海うみが太平洋たいへいようというのですよ。」とお教おしえくださいましたので、この海うみをどこまでもいけば外国がいこくへいかれるのだらうと思おもいました。

「あの、赤あかい船ふねは外国がいこくへいくのでしょいか。」

と、露子つゆこはお姉ねえさまに問といました。するとお姉ねえさまは、いつもじつとものをごらんにななるとき目めに涙なみだを浮うかべられますが、やはり目めに涙なみだをたたえて、

「そうねえ。」

と、いつて、^{しばし}暫時、^{あたま}頭をおかしげになつていましたが、

「ああ、きつと外国へいくんでしようよ。」

と、やさしくいわれました。

「^{いつか}幾日ばかりかからなければ、^{がいこく}外国へいかれませんの。」

と、^{つゆこ}露子は聞きました。

「^{いつか}幾日も、^{いつか}幾日もかからなければ、^{がいこく}外国へはいかれません。^{いく}幾千マイルという^{とお}遠く

へいくんですもの。」

と、^{ねえ}お姉さまはいわれました。

そう^{おも}思うと、なんとなくあの^{あか}赤い^{ふね}船が^{なつ}懐かしいのであります。あの^{あか}赤い^{ふね}船は
太平洋を^{わた}渡つて、^{うつく}美しい^{くに}国へいくのかと思^{おも}いますと、あの^{あか}赤い^{ふね}船に^{ひと}どんな人

の
が乗っていて、なにをしているかと考かんがえました。けれど遠とおくへだたっていますので、
ただ赤あかい筋すじと、ひらひらひるがえっている旗はたと、太ふとい煙えんとつ突とつと、その煙突えんとつから上のぼ
る黒くろい煙けむりと、高たかい三本ぼんのほばしらとが見みえたばかりであります。そして船ふねの過すぎ
る跡あとには白しろい波なみがあわだっているばかりでありました。

露つゆこ子は、どうしてもその赤あかい船ふねの姿すがたを忘わすれることができませじぶんん。自分じぶんも、その船ふね
ののがいこくに乗のりって外がいこく国こくへいってみたい。そして、オルガンやピアノや、いおんがくい音楽おんがくを聞きいたり、
習ならったりしたいものだかんがと考かんがえました。見みるうちあかに赤あかい船ふねは、だんだん遠とおざかつて
しまひった。日ひは漸だんだん々にし西かたむに傾なみいて、波うえの上こがねいろが黄かがや金色かがやに輝かがやいて、あちらの岩いわ影かげ
が赤あかく光ひかった時じぶん分ぶんには、もうその船ふねの姿すがたは波なみの中うちに隠かくれて、煙けむりが一ひと筋すじ、空そら
に残のこっていたばかりです。

その日ひは、お姉ねえさまといっしょに海うみ辺べで遊あそび暮くらして、疲つかれた足あしをひきずって家うち

に帰りました。

四

明くる日、露子は窓によって、赤い船はいまごろどこを航海しているかと思つて、ちようどそこへ一羽のつばめが、どこからともなく飛んできました。

露子は、つばめに向かって、

「おまえは、どこからきたの。」

と聞きますと、つばめは、かわいらしくびをかしげて、露子をじつと見ていましたが、

「私は、南の方の海を渡って、はるばると飛んできました。」

と答えました。

「そんなら、太平洋を越えてきたの？」

と、露子つゆこの顔かおには覚おぼえず笑えみがあふれたのであります。つばめは、

「それは幾いくにち日ひとなく、太平洋たいへいようの波なみの上うへを飛とんできました。」

と答こたえました。

「そんなら、おまえは船ふねを見みなくて？ ……」

と、露子つゆこは聞ききました。

すると、つばめは、

「それは、毎日まいにち毎日まいにち幾いくそうとなく船ふねを見みました。あなたのお聞きになります船ふねは、

どんな船ふねですか。」

と問とい返かえしました。

露子つゆこはつばめに、その船ふねは赤あかい筋すじの入はいった船ふねで、三本ぼんの高たかいほぼしがあるこ

とから、自分じぶんの見みた記き憶おくのままを、いちいち語かたり聞きかせたのであります。

すると、つばめは、まったくびをかしげて、この話を聞いていましたが、

「その船なら、私はよく知っています。私が長い旅に疲れて、暮れ方、翼を

休めるため、海の上に止まる船のほばしらを探していましたとき、ちょうどその赤

い船が、波を上げて太平洋を航海していましたから、さつそく、その船のほば

しらに止まりました。ほんとうにその晩はいいお月夜で、青い波の上が輝きわた

って、空は昼間のように明るくて、静かでありました。そして、その赤い船の甲板

では、いい音楽の音がして、人々が楽しく打ち群れているのを見えました。」

と語り聞かして、つばめは、またどこへか飛び去ってしまいました。

露子は、いまごろはその船は、どこを航海しているだろうかと考えながら、しば

しつばめのゆくえを見守りました。